

7-1 否定・倒置

1 部分否定

次の2つの文を比べてみてください。

- (a) He knows everything about baseball.
 (b) He doesn't know everything about baseball.

(a) の文は「彼は野球についてすべてを知っている」という意味ですね。では、その否定文 (b) はどんな意味になり、どう訳せばいいでしょうか。

英語で、「100%」の意味を持つ語、たとえば *all*, *both*, *everything*, *everybody* や *always*, *necessarily* などが使われている文を否定文にすると「0%」の意味にならず、一部だけが否定されて、「全部が...」というわけではない; すべてが...とは限らない」という意味になります。このような否定を「部分否定」といいます。これを「全部知らない」と訳すと、それが部分否定なのか、「何も知らない」の意味なのかあいまいなので、上に書いたように「野球についてすべて知っているわけではない、...とは限らない」と訳するのが慣例です。

それでは「何も知らない」という意味を英語ではどう表現するかというと、次の (c) や (d) のように、*no* を含んだ否定語や *not ... any* の形を使います。

- (c) He knows *nothing* about X.
 (d) He doesn't know *anything* about X.

どちらも「彼はXについてまったく[何も]知らない」という意味です。このようにすべてが打ち消されて0%の意味になる場合を部分否定に対して「全体否定」とか「全否定」といいます。

2 二重否定

これは文字通り、1つの文の中で否定を2回重ねて使うことです。まず例を見てみましょう。

They cannot meet without quarreling.

これは「彼らは口論せずに顔を合わせることはありえない」、つまり「彼らは会うと必ず口論になる」という意味を表します。1つの文の中に、*cannot* と *without* という否定の意味を持った語が2回登場していますので「二重否定」と呼ばれます。また、次のように、主節と関係詞節の両方に否定語が含まれている場合にもそう呼ばれます。

There is no one who doesn't know about this.

(このことについて知らない人はいない)

さて、次の文を見てください。

* *I didn't eat nothing.* (《俗》私は何も食べなかった)

もちろん、これは現代の標準英語では誤りで、*I didn't eat anything.* または *I ate nothing.* というのが正しいのですが、英語の方言や、俗っぽい英語などでは、このように否定を2回重ねても意味が否定のままのことがあり、こうした形にも「二重否定」という用語が使われることがあります。この場合は、最初に紹介した(文法的に正しい)二重否定とは意味が違いますので注意しましょう。

3 語否定と文否定

not などの否定語がどこからどこまでを否定しているのかを考えることは文の意味を考える場合に重要です。英語では、述語動詞を否定すると文全体の内容が打ち消されるのがふつうです。たとえば、

He <i>is</i> a teacher. (彼は教師です)	→	He <i>is not</i> a teacher. (彼は教師ではありません)
She <i>likes</i> pizza. (彼女はピザが好きです)	→	She <i>doesn't like</i> pizza. (彼女はピザが好きではありません)
He <i>can play</i> the flute. (彼はフルートが吹けます)	→	He <i>can't play</i> the flute. (彼はフルートが吹けません)

しかし、**not** は置く位置によっては、文全体の内容を否定しないで、直後の語句だけを否定する場合があります。たとえば、

Many of them believed it. (彼らの多くがそれを信じた)

→ **Not many of them believed it.**

(彼らのうちそれを信じたものは多くはなかった)

I told them *to come*. (私は彼らに来るように言った)

→ I told them **not to come**. (私は彼らに来ないように言った)

このように、文中の一部の語句だけが否定される用法は「語否定」と呼ばれています。それに対して、最初にあげたような、**文全体の内容が打ち消される**用法は「文否定」と呼ばれます。

この語否定と文否定はちょっと紛らわしい場合もあります。たとえば、

I **didn't** marry him because he was rich.

という文は、文脈によって、

(a) 「彼が金持ちなので結婚しなかった」(=彼と結婚しなかった)

(b) 「彼が金持ちだから結婚したわけではない」(=彼と結婚した)

のどちらにも解釈が可能です。(a) の **not** は **marry** という動詞だけを否定する「語否定」ですが、(b) の **not** はその否定の範囲が **because** 以降の理由まで含めた文全体に及んでいますので「文否定」だと考えることができます。

4 準否定語

英語で「ほとんど～ない」「めったに～ない」のような意味を持つ場合を「準否定」と呼び、そのような意味を持つ語を「準否定語」といいます。以下のようなものがあります。

- 数量を表すもの： **few, little**
- 頻度を表すもの： **seldom, rarely, scarcely**
- その他： **hardly**

これらの語句はすでに否定の意味を含んでいますから、**not** や **never** といった他の否定語と同時に使うことはできません。

× I **can't rarely** find time to do it.

(それをする時間がめったに見つけれられない)

⇒ **can't** ⇒ **can** にする

また、付加疑問文を作るときも、他の否定文と同様、肯定形の形を添えて作ります。

Tommy **seldom** visits us, *does he*?

(トミーはめったに私たちのところに来ないよね)

5 倒置とその種類

日本語では「僕は君のことが好きだ」を「好きなんだよ、君のことが、僕は」みたいに語順を変えていうことが可能です。しかし英語では、I love you. という文を Love you I. という語順でいうことはできません。日本語には「が」や「を」といった助詞があるおかげで単語の配列はかなり自由ですが、英語は語順が大切ですから、自分が好きなようにやたら単語を並べていいわけではなく、もし語順を変えるときは一定のルールが存在します。それが「倒置」です。